## 関連文化財群11　山陰と山陽をむすぶ鉄路の夢　～津山の鉄道文化財が語る人と歴史のドラマ～

### 概要

津山を経由する山陰山陽連絡鉄道計画は明治 22（1889）年に始まり、明治 25（1892）年に公布された「鉄道敷設法」に条文化された。津山に陸蒸気（おかじょうき）がやってきたのは明治 31（1898）年で、陰陽連絡鉄道の結節点になったのは昭和 7（1932）年、東西南北鉄道交通の要衝となったのは昭和 11（1936）年であった。その後も新駅開業に向けた運動が起こる等、美作には鉄道に賭けた人々の夢とドラマが溢れている。鉄道記念物・旧津山扇形機関車庫と転車台をはじめとする津山圏内の鉄道建造物等は、継承すべき近代化の証人であり文化遺産である。

なお、ここでのストーリーは、主に市内を中心とした記述としているが、鉄道はその性格上、市内を限定としたストーリーとすることが難しいことや、ストーリーの理解を更に深めることができるよう、資料編に改めて全編を掲載した。

### ストーリー

#### ■津山往来と中国鉄道ルート

鉄道黎明期の明治時代初期から発展期の明治時代後期まで、敷設ルートとしてまず考えられたのが江戸時代までに整備されてきた往来沿いであった。岡山県初の鉄道として明治 24（1891）年 3 月 18 日に開業した山陽鉄道三石・岡山間 41km もほぼ山陽道と並走した。それでは明治 31（1898）年 12 月 21 日、二番目に開業した中国鉄道岡山市・津山（現在の津山口）間 56.2km の場合はどうであろう。中国鉄道会社は当初、山陽鉄道岡山駅に乗降場を併設する計画であった。ところが、山陽鉄道会社との折衝が物別れに終わったことから、岡山駅からおよそ 500m 離れた、現在の岡山気動車区の場所に岡山市駅を設けた。もっとも、山陽鉄道岡山駅が江戸時代までに形づくられていた市街地から離れたところに置かれていたため、岡山市駅も津山往来の起点とされる「神屋町と栄町の間の石橋」から 1 km ほどの距離となった。

津山往来は「神屋町と栄町の間の石橋」から北に向かい、半田山から栢谷、吉宗からはおおむね国道 53 号と同じルートで津山を目指している。それでは線路はどこに敷かれたのであろう。中国鉄道会社主任技師・小川資源は、岡山市・玉柏・野々口を津山往来から大きく外れたルート、野々口・福渡間はほぼ津山往来沿いとしている。それは半田山越え、辛香峠越えを避けたためであると考えられる。もっとも玉柏・野々口間には管掛から手立隧道に至る難工事箇所があった。しかし工事の難易度、勾配や曲線などを検討した結果、玉柏経由に軍配を挙げたものと思われる。岡山市・津山間の急勾配は玉柏・野々口間の手立隧道前後、金川・建部間の箕地隧道前後、福渡・

神目間の第１誕生寺川橋梁と第４誕生寺川橋梁の間の 25‰である。金川･福渡間を津山往来ルートとし、箕地隧道の掘削を決めたのは、敷設距離の短縮と旭川沿い狭隘地への敷設を回避したためであると考えられる。福渡の町からは津山往来を外れて旭川沿いを北上し、高浜から誕生寺川に橋梁をわたしながら半径 300m で蛇行をつづけ、石引付近で山越えを終えた津山往来と合流する。この迂回同様の勾配忌避は亀甲駅の弓削方と亀甲･佐良山間にもあるが、岡山市街地･野々口間以外のルートはおおむね津山往来に沿っている。

### ■出雲往来と姫新線ルート、因幡道と因美線ルート

姫新線姫路・新見間 158.1km は大正 12（1923）年から昭和 11（1936）年にかけて順次開業していった。線路は万能峠を貫く万ノ峠隧道 608.5m で兵庫県から岡山県に入り、トンネル西踏切で峠を越えてきた出雲往来と交差する。『新編 作東町の歴史』には、森藩が出雲往来に列植した松が、播美鉄道の敷設工事で全て切り倒されたと記されている。播美鉄道は姫新ルートの一部を計画していた未成線である。当時、作東地区の松は既に少なくなっていたが、竹田の粟田から万能峠の頂までが残っていたという。線路はトンネル西踏切から出雲往来に沿って土居宿、そして美作江見駅に至るが、美作江見・林野間では出雲往来を大きく南に逸れている。山陰山陽連絡鉄道敷設運動の起こった明治 22（1889）年から、播州・津山間の鉄道は倉敷経由で計画されてきた。それは勾配を避けることと、湯郷温泉へのアクセスを検討したからであると思われる。林野駅からの線路は勝間田付近から再び出雲往来と並走しながら東津山駅に入る。

出雲往来が津山城下を通過したのに対し、津山駅は吉井川の南側に置かれている。鉄道が吉井川をわたって城下に入らなかったのは、住民が橋梁建設に異を唱えたからである。中国鉄道津山駅の位置をめぐって人々は、明治 25（1892）年と明治 26（1893）年の水害を教訓に橋梁建設に反対した。中国鉄道会社ばかりでなく、未成に終わった津山軽便鉄道会社や西美鉄道会社も城下への駅建設を計画したが、線路が吉井川をわたることはなかった。もっとも家並みの続く城下に、駅や線路用地を確保するのは容易でなかったはずである。鉄道忌避の話は全国各地で語り継がれており、岡山県もその例外ではない。山陽鉄道では赤穂、三石、和気、熊山、西大寺、玉島、中国鉄道岡山･湛井間では総社、伯備南線倉敷･新見間では総社と高梁にあるが、いずれも信憑性を欠くものである。

津山・院庄間の線路は、第１吉井川橋梁の西で出雲往来に再接近する。坪井駅の西で一時離れるが、美作追分駅まではほぼ並走する。ところが美作追分・久世間は出雲往来を大きく南に外れ、落合を迂回している。出雲往来ルートには急勾配とトンネル工事が待ち構えていたが、落合は松山往来、大山道、備前往来、月田街道、木山街道が分岐する交通の要衝であった。落

合経由については『落合町史』に詳しいが、敷設距離は7km から 15km に倍増した。美作落合駅から北に向かった線路は、久世駅の東およそ 1.5km 地点で出雲往来に近づき、中国勝山駅の西約2km まで並走する。そこから出雲往来は美甘、新庄から四十曲峠を越えて根雨に至るが、線路は新見に向かって西に進む。明治 22（1889）年に起こった山陰山陽連絡鉄道姫路・津山・米子間や、未成に終わった中国鉄道津山・米子間はどちらも出雲往来ルートであった。

明治政府の鉄道会議は、粘着運転で美甘・新庄・四十曲峠間を越えるのは不可能で、信越旧線横川・軽井沢間で採用したアプト式に頼らざるを得ないと判断した。鉄道黎明期における鉄道工事の定石は、トンネルは掘らない、掘らざるを得ない時は登れるところまで登って最短距離で掘る。高価な輸入橋桁はできるだけ架けない。架けざるを得ない時は川に対して直角に最短距離で架けるであった。姫新線中国勝山・新見間の工事が始まったのは、その定石が守られていた昭和3（1928）年2月 15 日であった。

大正3（1914）年5月、鉄道院告示第 32 号で軽便鉄道智頭線鳥取・智頭間が通達された。因美線鳥取・智頭間 31.9km の敷設工事は大正5（1916）年 12 月1日、鳥取側で起工し、大正 12（1923）年6月5日開業した。大正7（1918）年の第 41 議会では鳥取・津山間 73.4km が承認されたが、岡山県側の工事が始まったのは大正 15（1926）年2月6日であった。因美線の岡山県内ルートは概ね因幡道（加茂往来）に沿って計画された。

## ■大江太郎と日下輝道

本州の鉄道はイギリス、北海道はアメリカ、九州はドイツの技術で敷設された。軌間の国際規格は新幹線の4呎5吋1／2（1,435mm）であるが、明治政府は3呎6吋（1,067mm）を採用した。それはアジアの国々で植民地政策を展開してきたイギリスのアドバイスを素直に受け入れたからである。狭軌鉄道に決定した大隈重信や伊藤博文は、軌間の持つ意味を理解していなかったのである。明治政府は近代国家建設に向けお雇い外国人を招聘した。鉄道敷設のため日本を訪れた技師にはエドモンド・モレル、ジョン・ダイアック、トーマス・シャービントン、ウォルター・ページ、リチャード・ボイルらがいたが、明治 12（1879）年4月 14 日、エドモンド・グレゴリー・ホルサムは新橋鉄道局の落合丑松、平野平左衛門、山下熊吉を、8月7日には神戸鉄道局の日下輝道、平松好太、岡野熊吉を機関方に任命した。初の日本人機関士となった6人の中の一人、日下輝道は嘉永7（1854）年4月5日、苫田郡津山町生まれの士族である。明治4（1871）年、藩命により江戸浜町の箕作秋坪塾に学んでいた。しかし廃藩置県のため一時帰国し、再び東京を目指した明治6（1873）年、神戸付近で進められていた敷設工事を見て鉄道に興味を抱き、同郷の先輩で神戸機関庫主任・大江太郎の紹介で同年 10 月、神戸機関区に

汽車組立夫として採用された。その後は明治 26（1893）年の鉄道技手から沼津機関庫主任、日露戦争では第五班長兼車両長として満州に赴任し、帰国後は鉄道技師、新橋機関庫主任などを歴任し大正 13（1924）年１月 13 日､70 年の生涯を閉じた。鉄道黎明期の津山は､大江と日下､二人の鉄道員を輩出した。

## ■美作の鉄道計画

明治 21（1888）年 12 月 23 日、山陽鉄道神戸・姫路間が開業し、馬関（下関）に向けた線路西進への期待が高まった。明治 22（1889）年５月 29 日付山陽新報の「鉄道布設計畫」は、姫路と三日月地方の人士が山陽鉄道の支線を播州から津山に向けて敷設し、美作、因幡、伯耆の貨物を播州に輸送しようと目論んでいると報じている。それは、岡山に鉄道が延びれば、道路事情のよい岡山・津山間に山陰からの物流を奪われ、姫路地方での鉄道利用が減少するのではないかという懸念からの発想であった。山陰新聞や鳥取新聞も相次いで同じ内容を記事にしたが、敷設ルートとされた久崎・英田・津山間はほぼ出雲往来に沿うものであったと思われる。山陽新報は６月 22 日付「備中國淺口郡玉島通信」で、浅口郡の板谷九郎らが玉島港・米子港間の鉄道敷設に向けた会合を数回持ったと伝えている。岡山県では明治 22（1889）年、山陰山陽連絡鉄道敷設運動が急激な盛り上がりを見せたのであるが、その背景には岡山に山陽鉄道工事の槌音が響き始め、鳥取県の境からは米子を経て日本海沿いを東進する山陰鉄道が計画されていたことがある。播州・津山間に山陽鉄道の支線、伯耆からは山陰鉄道の支線を山陽に向けて敷設する計画がなされたのである。二つの支線が連絡する津山は敷設運動の台風の目となった。

小学校の教諭や校長らが集まり囲碁や浮世話、詩文など風流を楽しんでいた「倶樂會」は、会員の増加とともに政治談の盛んな政治クラブ「津山淡水会」となった。津山淡水会は明治 22（1889）年７月、山陰山陽連絡鉄道についての理事会を開き、山陽鉄道の支線と山陰鉄道の支線の調整役を担うことを決議した。おおまかな経緯はこうである。東京で土木業を営む岡山出身の篠野憲令はたびたび、英田郡長・池田長準に鉄道敷設を提案してきた。池田は東北條郡長・水野清や英田郡内の有志者に諮り、津山淡水会に協力を求めたことから事態は大きく動いた。山陽鉄道支線姫路・津山間およそ 21 里（84km）の敷設費 200 万円は篠野が東京で株を売って賄い、山陰鉄道支線境・津山間約 20 里（81km）300 万円の株式は伯耆、雲州、倉吉の有志者が受け持つことになった。津山淡水会の役割は二つの支線の調整と､美作での株式販売であった。

その運動で中心的役割を演じたと思われるのが勝南郡池ケ原の大岡熊次郎である。大岡は同年７月 25 日、英田郡長、勝田郡長らと姫路・米子間の鉄道敷設会合を開いた。９月には津山市二階町の矢吹貫一別邸に事務所を置き、美作 12 郡の代表 30 名が連署した仮免許申請書を提

出した。また根雨や米子、境で鉄道敷設に向けた集会を持ち、伯耆の有志者らとの連携を深めた。内閣鉄道局は同年秋、陰陽鉄道会社の申請ルートを実地測量するため、帝国工業の技師・小田川全之（まさゆき）を津山に派遣した。小田川は姫路・津山ルート、津山・四十曲峠・根雨・米子ルート、津山・人形峠・倉吉・米子ルート、伯備線ルート、津山線ルートの実地測量を行ったが、陰陽鉄道会社の申請は却下された。しかしその後の山陰山陽連絡鉄道運動には山陽側の始点を龍野、和気、岡山、倉敷などとする動きが現れたり、矢掛・吹屋・新見・米子間ルートが加わるなどしたため熾烈さを増した。明治 23（1890）年には鳥取県議会議長ら、明治 24（1891）年には岡山県議会議長や鳥取県議会議員ら、倉吉の武信克三らが岡山・津山・倉吉・米子間を請願するなどしたが、いずれも免許状下付には至らなかった。岡山県南の鉄道計画は明治 29（1896）年に免許状を下付された兒島鉄道倉敷・味野間をして嚆矢（こうし）とするが、作州の計画と運動は県南のそれを大きく凌駕するものであった。小田川はその後、群馬県職員から古河鉱業に転じ、足尾銅山鉱山長や足尾鉄道役員などを歴任し、鉱毒事件の解決にも奔走した。アメリカから持ち帰った「安全専一」という考えを「安全第一」として定着させたのも小田川である。

## ■中国鉄道

第２次鉄道熱で誕生したのが中国鉄道岡山市・津山（津山口）間である。中国鉄道取締役社長に就任した杉山岩三郎は明治 26（1893）年岡山を起点とする山陰山陽連絡鉄道と岡山の市街鉄道、明治 27（1894）年吉備鉄道石井・浅尾間、明治 28（1895）年中国鉄道岡山・境間、明治 29（1896）年岡山鉄道岡山・宇野間、明治 30（1897）年山陰鉄道倉吉・八橋（やばせ）・米子・境間、明治 36（1903）年山田鉄道三重県山田・東見付間、明治 43（1910）年中国鉄道原古才・稲荷間と美作軽便鉄道津山･江見間、明治 44（1911）年福島軽便鉄道鹿田･福島間、大正 12（1923）年中備電気軌道岡山・倉敷間と早島・天城間などを計画した。中国鉄道会社が仮免許申請のため明治 26（1893）年７月に招聘した技師は杉山輯吉（しゅうきち）であったと思われ、免許状下付後の岡山・米子間実施設計を担当したのは小川資源であった。信越旧線横川・軽井沢間、日本鉄道、京都鉄道、西成鉄道などでの実績を買われた小川は、中国鉄道では技師長から専務取締役を歴任し、官名を帯びて東亜の鉄道研究に携わった。岡山市・津山間の敷設工事には大倉粂馬（くめま）や菱川吉衛らが参加した。大倉は大成建設の前身となる大倉組の番頭であった。岡山の実業家・菱川は明治 10（1877）年、菱川組を立ち上げた。明治 22（1889）年にはイギリス人ジョン・モリスに指導を受け、岡山・広島間に電線を架設した。鉄道事業では中国鉄道の発起人や債権者に名を連ねた。敷設工事では中国鉄道のほか山陽鉄道、西大寺軌道、山陰線、豊肥線、肥薩線、久大線、日豊線、高森線、岩徳線、三江線、伯備線、四国や朝鮮半島での敷設工事、門司港駅の施工を

請け負った。また岡山臨港鉄道や稲荷山鋼索鉄道を計画し、岡山電気軌道第３代社長も歴任した。しかし昭和３（1928）年の吉衛逝去の後、菱川組は一代限りで解散・廃業となった。

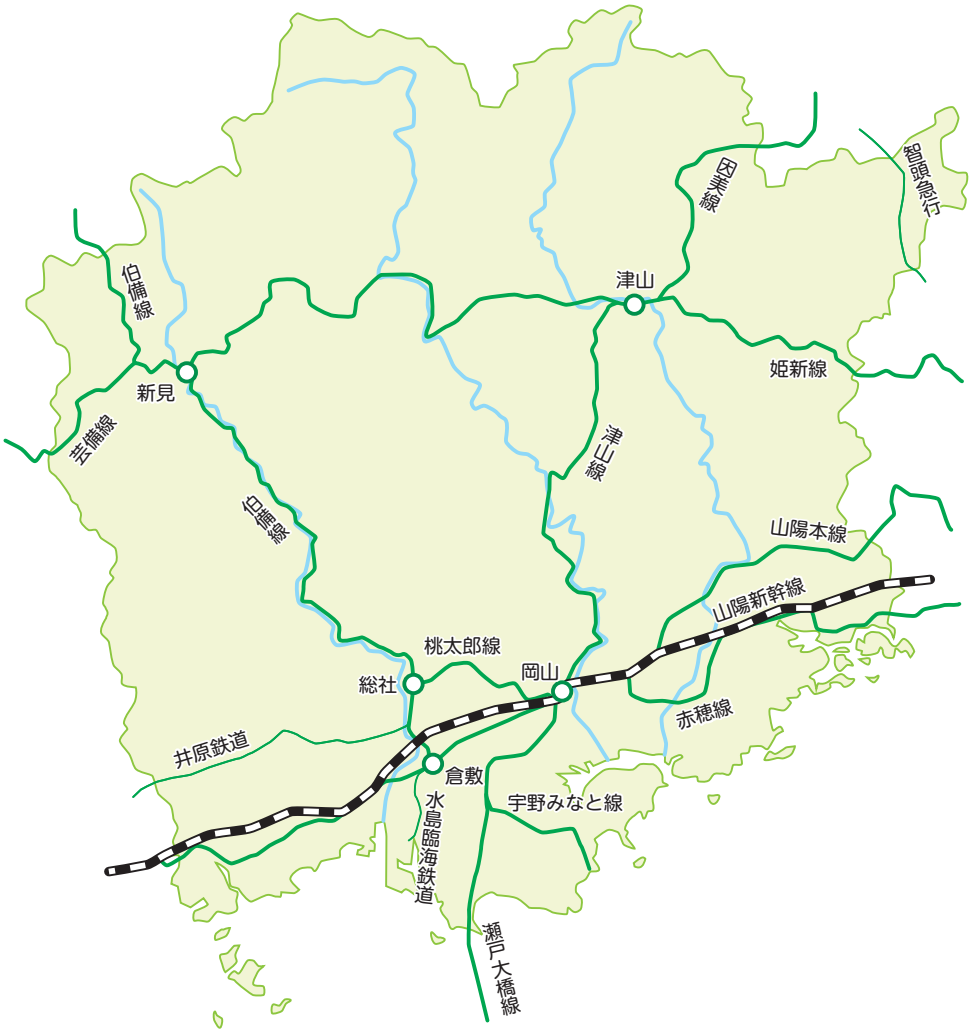
中国鉄道会社にイギリス製の橋桁を納入したのは、磯野計が興した磯野商会である。磯野は安政５（1858）年、津山町椿高下に津山松平藩士・磯野湊の二男として生まれ、神戸洋学校で箕作麟祥、三叉学舎では箕作秋坪に学び、大学南校に進んだ。東京大学法学部を卒業し明治 13（1880）年、三菱給費生としてイギリスに出帆、ノリス・アンド・ジョイナー商会で商業実務と複式簿記を修得した。帰国後は郵船汽船三菱会社などに勤務したが明治 18（1885）年、横浜で船舶納入業を始め明治 19（1886）年、明治屋を創業した。明治 21（1888）年トーマス・グラバーの推薦でジャパン・ブルワリーのキリンビール総代理店、明治 24（1891）年には明治火災保険初の代理店になった。明治 27（1894）年になると明治屋輸出入店を開設し、明治 29（1896）年５月、北越鉄道会社のレール入札に成功し、1897（明治 30）年、グラスゴーに H. ISONO ＆ CO.、東京に磯野商会を設立した。磯野は同年２月 14 日、肺炎の一種、ハイキン症のため 39 歳で逝去したが、津山線の作三〇年式上路プレートガーダは磯野商会が輸入したものである。

## ■姫新線と因美線

明治 22（1889）年の山陰山陽連絡鉄道運動から鉄道事業に参加し、中国鉄道会社で専務取締役を務めた立石岐は、作備線津山･院庄間の敷設用地に自邸前の土地を提供した。大正 12（1923）年８月 21 日の作備線津山口・津山・美作追分間開業とともに営業を始めた津山駅本屋を、山陽新報は「現在縣下何ずれの驛の追従をも許さない理想的最新式の大驛」「開け行く大津山町の將来に相應しい」と賞した。津山駅構内には岡山機関庫津山分庫が完成し、大正 13（1924）年には津山機関庫に改称された。作備線津山口・津山・新見間が全線開業した昭和５（1930）年 12 月 11 日には津山機関庫に 60ft 転車台が置かれ、姫津線姫路・東津山間が全線開業した昭和 11（1936）年４月８日には 60ft 転車台を取り囲むように鉄筋コンクリート造 17 線の扇形機関車庫が竣工した。同年 10 月１日、姫津線姫路･東津山間、因美線東津山･津山間、作備線津山･新見間が姫新線姫路･新見間とされた。昭和 29（1954）年 10 月１日には楢原駅、昭和 33（1958）年４月１日古見駅、昭和 38（1963）年 10 月１日西勝間田駅が開業したが、西勝間田駅は大岡熊次郎の屋敷があった池ケ原の最寄り駅である。

因美線は「鉄道敷設法」に謳われた山陰山陽連絡東方線姫路・鳥取・境間の一部であるが、敷設工事が始まったのは軽便鉄道智頭線鳥取・智頭間が承認された大正３（1914）年５月１日であった。大正７（1918）年には智頭・津山間の延伸が認められ、大正 12（1923）年６月５日、

因美北線鳥取・智頭間が開業した。ところが因美南線津山・智頭間の着工は大正 15（1926）年２月６日にずれ込んだ。その原因は比較線の出現にあった。大正７（1918）年 11 月頃、智頭・坂根・佐用・平福・姫路間、大正 10（1921）年９月頃、智頭・那岐・豊並・勝田・古吉野・植月・広野・高野・津山間、大正 13（1924）年には智頭・勝間田間が現れた。争奪戦は代議士への事情聴取に発展し、新聞が報じるところとなった。鉄道省は静観せざるを得なかったが大正 14（1925）年 12 月、当初計画の加茂経由に決断した。昭和７（1932）年７月１日智頭・美作河井間が開業し、因美線鳥取・津山間全線が開業した。昭和 16（1941）年美作河井駅構内に雪掻き機用転車台が設置され、昭和 38（1963）年４月１日には三浦駅が開業した。津山線、姫新線、因美線の列車が全て津山駅発着となったのは、中国鉄道が国有化された昭和 19（1944）年６月１日である。




岡山県内の鉄道網

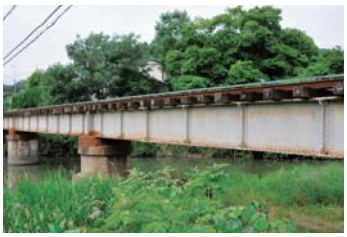
## 構成文化財

### ❶ 津山線

#### 1 クリーブランドブリッジ社製作三〇年式上路プレートガーダ

１－①　第１佐良川橋梁

第１佐良川橋梁、第２佐良川橋梁、第 21 架道橋（亀甲・佐良山間）、谷川橋梁（佐良山・津山口間）：イギリス人技師ポーナルの設計により明治 30（1897）年 11 月 17 日、鉄作乙第 1075 号達で通達された作三〇年式上路プレートガーダ。イギリス、ダーリントンのクリーブランドブリッジ社が明治 30（1897）年に製造し、磯野商会が中国鉄道会社に納入した。



１－②　第２佐良川橋梁

１－③　第 21 架道橋

１－④　谷川橋梁

#### 2 ドーマンロング社製Ｉビーム

第２湯ノ谷開渠、第１河原開渠、第２河原開渠（佐良山・津山口間）：鉄道作業局技師・古川晴一が明治 28（1895）年に設計し、明治 30（1897）年８月 25 日「作三〇年式」として通達されたＩビーム。イギリス、ミドルズブラのドーマンロング社製。

２－①　第２湯ノ谷開渠

２－②　第１河原開渠

２－③　第２河原開渠

#### 3 煉瓦造橋台

第 21 架道橋（亀甲･佐良山間）､第８避溢橋､第１河原開渠（佐良山･津山口間）：橋台をイギリス積み煉瓦、最上部に花崗岩の床石を置く。津山往来を跨ぐ第 21 架道橋の橋台には隅石が付けられている。

３－①　第 21 架道橋

３－②　第８避溢橋

３－③　第１河原開渠

### 4 旧津山駅（現在の津山口駅）

4－①　旧津山駅

明治 31（1898）年 12 月 21 日中国鉄道津山駅として開業し、作備線延伸に伴い大正 12（1923）年 8 月 1 日津山口駅になった。かつては鋸屋根の駅本屋に等級別待合所と改札口があり、広い駅構内には矩形機関車庫と転車台、給水・給炭施設などが置かれていた。駅前には運送会社などが軒を連ね、周辺には木材市場もあった。その姿は西美鉄道資料、江見写真館が所蔵するガラス乾板、塩山家が所蔵する古写真から徐々に明らかになってきた。開業時の姿をとどめるのは対向ホームで、擁壁は布積み花崗岩。昭和 30 年代に行われたかさ上げ跡はない。

### 5 用地界標

中国鉄道会社の社章中が彫られた花崗岩の境界杭群。旧津山駅の最北端にも 2 箇所残る。津山線、吉備線、稲荷山線跡にも現存する中国鉄道会社の用地界標は、山陽鉄道会社の用地界標に並ぶ貴重な鉄道文化財。京都鉄道博物館も所蔵する。

5－①　第 1 河原開渠付近

5－②　第 2 河原開渠付近

5－③　津山口駅構内

## ❷ 姫新線

### 1 東津山駅

1－①　東津山駅

昭和 3（1928）年 3 月 15 日、因美南線津山・美作加茂間とともに開業したが昭和 11（1936）年 10 月 10 日、津山・東津山間は姫新線に編入された。駅構内にはかつて信号取扱所と木造跨線橋があった。駅舎の駅務室は取り壊され、待合のみが現存する。東津山駅東方の請願踏切東側で姫新線と因美線が分岐する。

### 2 大溝川橋梁

2－①　大溝川橋梁

因美南線第 1 工区津山・高野間で工事され、大正 15（1926）年 2 月 6 日着手、昭和 2（1927）年 8 月 1 日竣工。橋桁の作三〇年式上路プレートガーダは転用されたもの（東津山・津山間）。

## 3 吉井川の橋梁

吉井川橋梁（東津山・津山間）は因美南線第１工区津山・高野間で工事され大正 15（1926）年２月６日着手、昭和２（1927）年８月１日竣工。第１吉井川橋梁（津山・院庄間）と第２吉井川橋梁（院庄・美作千代間）は作備線第１工区で工事され大正 11（1922）年７月３日竣工。現在は姫新線の橋梁ではあるが、因美線と作備線、別々の路線として工事されたため橋梁名に連続性がない。第２吉井川橋梁は西美鉄道会社が一部工事をした後、鉄道院に買収された。

３－①　吉井川橋梁

３－②　第１吉井川橋梁

３－③　第２吉井川橋梁

## 4 津山駅

作備線津山口・美作追分間が開業した大正 12（1923）年８月 21 日開業。ドーマーウィンドーとハーフティンバーを特徴とした駅本屋を山陽新報は「現在縣下何ずれの驛の追従をも許さない理想的最新式の大驛」「開け行く大津山町の將来に相應しい」と賞したが、開業から 43 日後に焼失し、翌年復元された。建物資産標の日付は、駅本屋が「大正 12 年６月」、１番・２番ホームの旅客上家５号は「大正 11 年 12 月」、３番・４番ホームは「昭和３年３月」。開業から使われつづけている地下通路には、第２次世界大戦の空襲警報発令時、駅職員が利用客を避難させたという。駅本屋の中には地下通路の旧階段が現存し、古レールが再利用されている諸舎１号（建物資産標は昭和 31 年３月）と１番・２番ホームの旅客上家８号（同昭和 36 年３月）のうち、旅客上家８号にはイギリスのボルコウ・ボーン社が明治 30（1897）年、中国鉄道会社に向けて製造したレールが使われている。

４－①　全景

４－②　駅本屋

４－③　ホーム

## 5 旧津山扇形機関車庫と転車台

５－①　旧津山扇形機関車庫と転車台

作備線津山口・津山・美作追分間が開業した大正 12（1923）年、まず平面スイッチバックの津山駅構内に矩形機関車庫が完成した。次に作備線が全線開業した昭和５（1930）年、矩形機関車庫の横広場に 60ft 下路式転車台図面番号Ｇ２－１が設置された。さらに姫津線が全線開業した昭和 11（1936）年、転車台を取り巻くように鉄筋コンクリート造スラブ構造 17 線の扇形機関車庫が竣工し、矩形機関車庫は解体された。扇形機関車庫は昭和７（1932）年に通達された「扇形機関車庫設計標準図」丙図に相当し、京都鉄道博物館の梅小路機関車に次ぐ現存二番目の規模。扇形機関車庫と転車台は平成 30（2018）年 10 月 14 日、登録鉄道記

念物から準鉄道記念物を通り越して鉄道記念物に指定された。現在は内燃動車 13 両を展示する津山まなびの鉄道館の主要施設。

### 6 立石踏切

6－①　立石踏切

立石岐は、明治 22（1889）年に津山が台風の目となった山陰山陽連絡鉄道運動で山陰側の有志者との調整役を務め、国会議員としては山陰山陽連絡鉄道実現に向けたはたらきかけをつづけるなど、「鉄道敷設法」に山陰山陽連絡線が謳われる基礎を築いた。専務取締役を務めた中国鉄道会社が米子延伸を断念したことを悔やみ、作備線の敷設が決まった時鉄道省に、自宅前の土地を線路用地として提供した。踏切や駅の名前には、土地や付近の主要な建造物の名前をあてるのが定石とされていたが、立石家住宅前の踏切は「立石踏切」と命名された。（津山・院庄間）。

### 7 院庄駅

7－①　院庄駅

大正 12（1923）年 8 月 21 日開業。建物財産標は「本屋 1 号大正 12 年 6 月」だが、駅務室は取り壊され待合のみが現存する。対向ホームや敷地の広さが、木材の輸送基地として賑わっていた頃の雰囲気を今に伝えている。プラットホームでは、昭和 30 年代に行われたかさ上げ規模を知ることができる。

### 8 美作線千代駅

8－①　美作千代駅

大正 12（1923）年 8 月 21 日開業。建物財産標は「本屋 1 号大正 12 年 6 月」。木造駅本屋と単式ホームが開業当時のまま残っている。姫新線美作土居駅と美作千代駅には官舎であった建物も残っている。

## ❸ 因美線

### 1 物見隧道

1－①　美作河井方

因美南線第 4・第 5 工区で工事され昭和 3（1928）年 10 月 22 日着手、昭和 6（1931）年 9 月 21 日竣工。道床をコンクリート、軌道中央に排水溝を設けた当時の最新設計。延長 3.77km は竣工当時、土讃線財田・坪尻間の猪ノ鼻隧道 3.845km に次ぐ長さであった。（那岐・美作河井間）。

## 2 擁壁

２－①　那岐・美作河井間

２－②　美作加茂・三浦間

因美南線第４工区美作河井・物見隧道間は昭和３（1928）年 10 月 22 日着手、昭和６（1931）年７月 12 日竣工。半径 300m カーブ、25‰勾配区間の石積み擁壁は２回、線路中心点移動を強いられた。（那岐・美作河井間）。加茂川沿いに積まれた花崗岩の擁壁は、因美南線第３工区美作加茂・美作河井間で工事され、昭和３（1928）年 12 月 28 日着手、昭和５（1930）年 11 月 15 日竣工（美作加茂・三浦間）。

## 3 美作河井駅

３－①　美作河井駅

昭和６（1931）年９月 12 日開業。木造の駅本屋、便所、待合所などが竣工時の姿で残る。建物財産標の日付は「昭和６年９月 30 日」。駅本屋は昭和５（1930）年に通達された「小停車場本屋標準図」第２号型。スチールトン社が大正 12（1923）年に製造したレールが現役。40ft 転車台、給水塔跡、珪石を積み出したプラットホームの跡、遷移転轍機があり、ホームには山から引いた水飲み場の跡がある。

## 4 美作河井駅 40ft 上路転車台

４－①　美作河井駅 40ft 転車台

明治時代初期の鉄道黎明期に輸入された転車台桁で、明治５（1872）年に開業した新橋駅と横浜駅に設置された桁と同規格。40ft 上路転車台桁は津軽鉄道津軽中里駅と津軽五所川原駅、博物館明治村東京駅にも現存するが、最も原型をとどめているのが美作河井駅の桁。大正８（1919）年用瀬駅、大正 11（1922）年智頭駅、つづいて昭和 16（1941）年美作河井駅に移転されたと思われるが、用瀬駅以前の履歴は不明。美作河井転向所では、雪掻き車の方向転換に使われていた。

## 5 加茂川の橋梁

松ぼうき（「山」の下に「川」と書く）橋梁、第２加茂川橋梁（美作河井・知和間）、太郎渕橋梁、第１加茂川橋梁（知和・美作加茂間）は、因美南線第３工区美作加茂・美作河井間で工事され昭和３（1928）年 12 月 28 日着手、昭和５（1930）年 11 月 15 日竣工。松ぼうき橋梁（美作河井・知和間）の橋台面長間 94.83m、高さ 20m は因美線最大。加茂川橋梁（美作滝尾・高野間）は、因美南線第２工区高野・美作加茂間で工事され大正 15（1926）年４月１日着手、昭和２（1927）年９月 30 日竣工。５橋梁は加茂川に架けられたプレートガーダ橋であるが、架設場所により名称が異なっている。

5－①　加茂川橋梁

5－②　松ぼうき橋梁

5－③　第２加茂川橋梁

5－④　太郎渕橋梁

5－⑤　第１加茂川橋梁

## 6 築堤

6－①　築堤

因美南線第３工区美作加茂・美作河井間で工事され昭和３（1928）年12月28日着手、昭和５（1930）年11月15日竣工。物見隧道から知和駅の美作河井駅方までは連続25‰勾配。そのうちの大ケ原隧道・知和駅美作河井駅方間およそ2.5kmが大築堤。中国山地を越える鉄道を象徴するような鉄道風景（美作河井・知和間）。

## 7 知和駅

7－①　知和駅

昭和６（1931）年９月12日開業。木造の駅本屋と待合が竣工時の姿で残る。建物財産標の日付は「昭和６年９月30日」。単式ホームだが側線跡がある。駅本屋は「小停車場本屋標準図」第１号型。

## 8 美作加茂駅

8－①　美作加茂駅

昭和３（1928）年３月15日開業。駅本屋は平成15（2003）年に建て直されたが、貨物ホーム跡と対向ホームの待合が往時の姿で残る。

## 9 津川橋梁

9－①　津川橋梁

因美南線第２工区高野・美作加茂間で工事され大正 15（1926）年４月１日着手、昭和２（1927）年９月 30 日竣工。昭和９（1934）年には室戸台風の被害を受けたが、径間 12.85m ２連の作三〇年式上路プレートガーダのまま復興された（美作加茂・三浦間）。

## 10 三浦駅

昭和 38（1963）年４月１日開業。岡山県内の因美線唯一の新設駅。プラットホームは古レールとコンクリートで造られた二つの顔を持つ。駅本屋はなく、「昭和 38 年３月 28 日」付建物財産標の貼られた待合所１号がある。駅前には三浦町内会が昭和 38（1963）年３月 28 日に建立した「三浦駅建設記念碑」がある。

10－①　プラットホーム 01

10－②　プラットホーム 02

10－③　一致団結大願成就碑

## 11 美作滝尾駅

11－①　駅本屋

11－②　貨物上家

昭和３（1928）年３月 15 日開業。木造の駅本屋は「小停車場本屋標準図」第３号型。「美作滝尾駅貨物上家１号　昭和３年３月 30 日」と書かれた建物財産標の貼られた貨物上家１号は岡山県内に唯一現存する貨物上屋。平成７（1995）年に公開された「男はつらいよ 寅次郎紅の花」冒頭部分のロケ地に選ばれた。平成 20（2008）年 10 月 20 日、造形の規範となっているものとして登録有形文化財に登録された。

## 12 高野駅

12－①　高野駅

昭和３(1928)年３月 15 日開業。木造の駅本屋は「小停車場本屋標準図」第３号型。建物財産標の日付は「昭和３年３月 30 日」。対向ホームや側線などが残る。プラットホームの擁壁上部には津山駅と同じタイルが貼られている。

## ❹ 津山市内の構成文化財

### 1 大岡家屋敷跡

1－①　大岡家屋敷跡

明治 22（1889）年に起こった山陰山陽連絡鉄道運動で中心的役割を演じ、明治 29（1896）年の陰陽中央鉄道、和津鉄道、作東鉄道などを計画した大岡熊治郎の屋敷跡。昭和 33（1958）年に取り壊されたが、倉庫 1 棟が半壊の状態で残っている。津山市池ケ原。

### 2 大岡家墓所

2－①　大岡家墓所

大正 9（1920）年 6 月 1 日に逝去した大岡熊治郎ら大岡家と岡家一族が眠る墓所。津山市池ケ原。

### 3 磯野氏先祖累代之墓

3－①　磯野氏先祖累代之墓

明治 26（1893）年、磯野計が建立した磯野家累代之墓。大信寺。津山市林田。

### 4 鉄道開通 70 年記念碑

昭和 17（1942）年 10 月 14 日「鉄道記念日」に設置された鉄道開通 70 周年記念碑。美作河井駅、美作加茂駅、美作滝尾駅、東津山駅前にある。東津山駅前の碑は元鉄道大臣・小川郷太郎が揮毫したもの。

4－①　美作河井駅

4－②　美作加茂駅

4－③　美作滝尾駅

4－④　東津山駅

## 5 蒸気機関車 C1180

５－①　蒸気機関車 C1180

昭和 10（1935）年３月 30 日、日立製作所笠戸工場で製造され、松山機関区、三次機関区を経て昭和 23（1948）年、津山機関区に配属された。昭和 37（1962）年の岡山国体ではお召し列車、昭和 46（1971）年には津山線の SL さよなら列車を牽引した。会津若松機関区に転出し昭和 49（1974）年、日中線の SL さよなら列車を引いた。昭和 51（1976）年、津山市立南小学校に静態保存されたが平成 29（2017）年８月９日、津山駅前に移設された。

## 6 磯野家跡

６－①　椿高下城代町士邸略図
（温地会誌より）

磯野計は安政５（1858）年８月 14 日、現在の津山市椿高下で磯野湊の二男として生まれた。

## 7 立石岐先生顕彰之碑

７－①　立石岐先生顕彰之碑

立石岐の顕彰碑。平成 20（2008）年建立。津山市二宮。

## 8 立石家住宅

８－①　立石家住宅

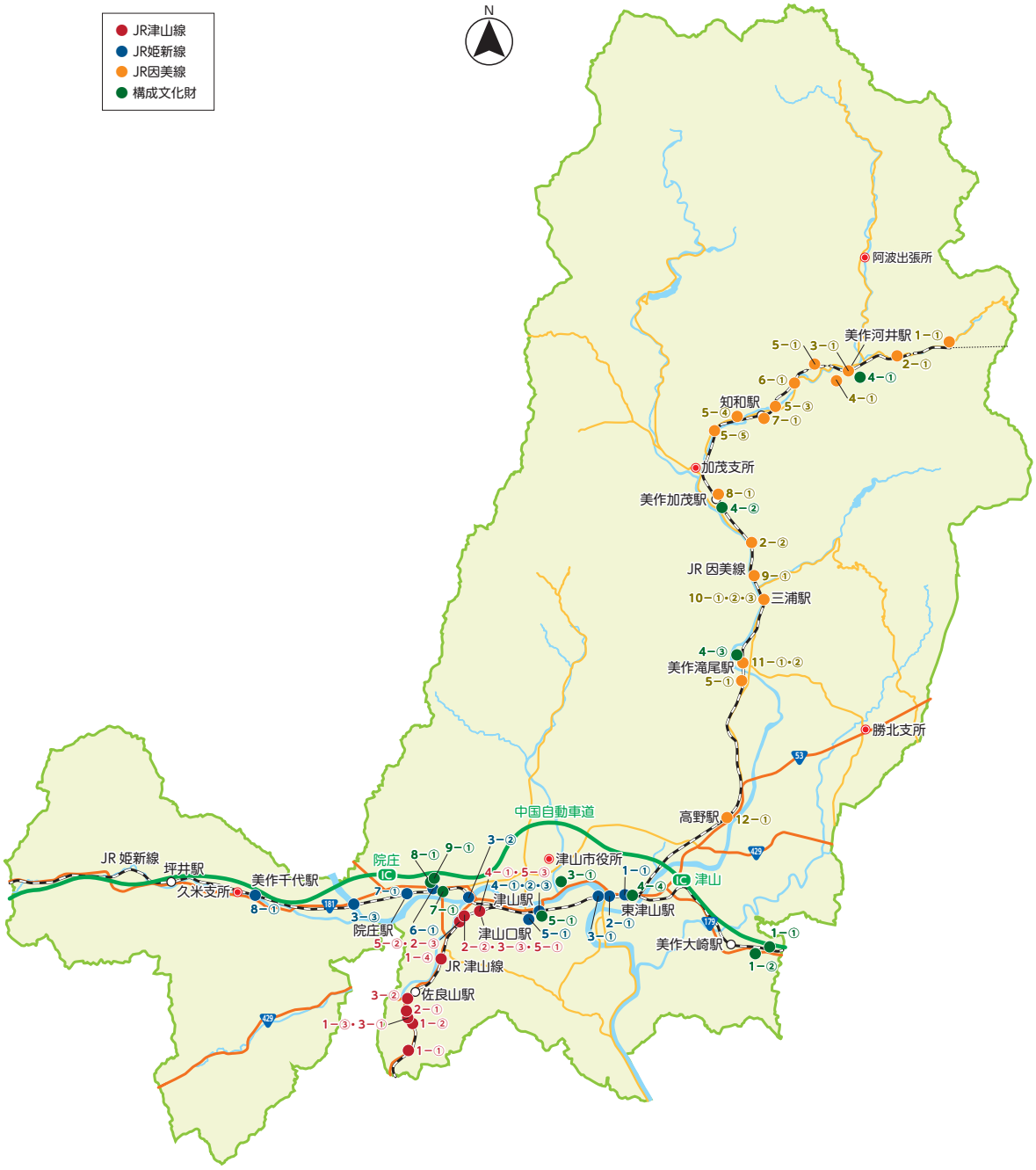
立石岐の屋敷。正面に立石踏切がある。津山市二宮。

## 9 立石家墓所

９－①　立石家墓所

昭和４（1929）年に逝去した岐ら立石家一族が眠る墓所。龍澤寺、津山二宮。

# 山陰と山陽をむすぶ鉄路の夢




※番号は構成文化財の写真番号

## 関連文化財群⑫　日本の近代化を支えた津山の洋学

### 概要

江戸時代、幕府はいわゆる「鎖国」政策によって海外との交流を厳しく制限し、西洋諸国では唯一オランダだけに貿易を許した。そのため、西洋の学問はオランダを通じて日本へもたらされ、「オランダ（和蘭・阿蘭陀）の学問」、「蘭学」と呼ばれた。やがて幕末にいたり、開国して様々な国の言葉や文化が伝わると、それらを包括して「西洋の学問」、「洋学」と呼ばれるようになっていく。津山藩からは、こうした蘭学・洋学を学び、日本の近代化に貢献した、優れた洋学者が数多く生まれている。西洋内科医学から植物学、化学をはじめて日本に紹介した宇田川家三代や、ペリー来航時にアメリカの国書を翻訳した箕作阮甫らである。江戸詰の藩医であった彼らは、江戸を舞台に活躍したが、国元津山にも足跡を残している。また、彼らの活躍に影響を受けて洋学を学び、地域の医療や教育に尽した人物もおり、各地にゆかりの史跡や資料が残されている。「津山の洋学」は、江戸時代後期から明治時代初期にかけての津山と日本を語るうえで、欠かすことのできない歴史なのである。

### ストーリー

#### ■蘭学の始まりと宇田川家三代

津山藩における蘭学研究の始まりは、江戸詰の津山藩医だった宇田川玄随（宝暦５（1755）年～寛政９（1797）年）である。玄随が 20 歳だった安永３（1774）年、杉田玄白らが『解体新書』を刊行、江戸で蘭学が興りはじめる。玄随は『解体新書』翻訳者たちとの交流を通じて蘭学の道へと進み、西洋医学がまだ外科や解剖学書しかない中で、日本で初めて西洋の内科医学書を翻訳、『西説内科撰要』と題して刊行した。

伊勢の出身で、玄随の養子となった宇田川玄真（明和６（1769）年～天保５（1834）年）は、西洋の解剖学、生理学、病理学を解説した『医範提綱』を刊行した。当時、西洋医学を志す多くの人に読まれ、「大腸」「小腸」「腺」「膵」など、この書で用いたことで、定着して現在でも用いられている名称が多くある。また、西洋の薬を紹介した『和蘭薬鏡』『新訂増補和蘭薬鏡』『遠西医方名物考』を刊行、そのかたわら箕作阮甫や緒方洪庵ら、蘭学の次世代を担う多くの弟子を育て、「蘭学中期の立役者」ともいわれている。

玄真の養子となったのが、大垣藩医江沢養樹の長男榕菴（寛政９（1798）年～弘化３（1846）年）である。榕菴は玄真とともに薬学に取り組み、そこから植物学、化学へと研究を発展。いずれも日本最初となる、植物学書『植学啓原』、化学書『舎密開宗』を刊行して、細胞や柱頭・花柱、

さらに元素・酸素・窒素・炭素・酸化・還元等多くの植物学・化学の用語を考案した。西洋の文化への好奇心は蘭学者の中でも随一といわれ、音楽や地理、歴史、動物学、昆虫学等、多くの分野の原稿を残している。わずか 19 歳でコーヒーを研究して論文「哥非乙説」を書き、「珈琲」の当て字を考案したのも榕菴といわれる。

この玄随、玄真、榕菴の３人で、西洋の内科医学から植物学、化学を日本に初めて紹介したことから、宇田川家三代は日本の近代科学を開いたと評価されている。宇田川家は、榕菴ののち、養子となった興斎（文政４（1821）年～明治 20（1887）年）が継いだ。興斎もまた優れた洋学者であり、幕末から明治初めにかけての約 10 年間は、藩主に従って津山で暮らしている。

## ■箕作阮甫と後裔たち

代々江戸詰であった宇田川家に対し、箕作阮甫（寛政 11（1799）年～文久３（1863）年）は国元の藩医の子として津山で生まれた。25 歳で江戸へ出て宇田川玄真に師事し、一度は帰郷するものの、32 歳で再び江戸詰を命じられ、以降は江戸で暮らしている。阮甫の業績の１点目は、医学や語学、地理、歴史等、多分野にわたる多くの翻訳書を作成し、西洋文化を日本に紹介したことである。これらの本は確認されているだけで 99 部 160 余冊あり、積み上げると背丈の高さを超えたという。２点目は黒船来航に際して、ペリーが持参したアメリカ合衆国フィルモア大統領の親書を翻訳し、ロシアのプチャーチンが来航した折には幕府の応接使に随行する等、幕末の対米露交渉に尽力したことである。さらに３点目は、幕府が洋学の研究・教育機関である「蕃書調所」を開いた際に教授職を命じられ、後進の育成を行なったことである。蕃書調所は幾多の改編を経て東京大学になることから、阮甫は「大学教授の第１号」ともいわれている。

阮甫の学究の精神は子孫へ引き継がれ、四女ちまと結婚した省吾（文政４（1821）年～弘化３（1846）年）は世界地図「新製輿地全図」とその解説書『坤輿図識』を刊行。坂本龍馬や吉田松陰ら幕末の志士たちに影響を与えた。三女つねと結婚した秋坪（文政８（1825）年～明治 19（1886）年）は、幕府の使節に随行して２度渡欧。明治維新後は私塾三叉学舎を開いて大槻文彦や東郷平八郎、原敬ら多くの門人を育てた。省吾の長男麟祥（弘化３（1846）年～明治 30（1897）年）は、法制官僚としてナポレオン法典の日本語訳に取り組み、「動産」「不動産」等多くの法律用語を考案した。秋坪の次男大麓（安政２（1855）年～大正６（1917）年）は東京大学日本人最初の数学教授となり、のちに東京、京都両帝国大学総長、文部大臣を歴任。三男佳吉（安政４（1857）年～明治42（1909）年）もまた東京大学日本人最初の動物学教授である。四男元八（文久２（1862）年～大正８（1919）年）は東京帝大の西洋史学科教授となった。その他にも、様々な分野で活躍した多くの学者が生まれたことから、「箕作の血は学者の血」と言われるまでになっている。

## ■津山から世界へ

こうした宇田川家、箕作家の活躍に触発され、津山でも洋学を学ぶ人たちがいた。津山藩の御料理人の長男として生まれた津田真道（文政 12（1829）年～明治 36（1903）年）は、江戸へ出て箕作阮甫や伊東玄朴に師事し、幕末には幕府のオランダ留学生に選ばれて渡欧。帰国後は幕臣となり、明治政府にも登用されて司法の分野で活躍した。明治 23（1890）年には第１回衆議院議員選挙に当選し、初代副議長も務めている。

国元の藩医久原洪哉（文政８（1825）年～明治 29（1896）年）の長男として津山で生まれた躬弦（安政２（1855）年～大正８（1919）年）は、上京して箕作麟祥や秋坪の塾に入門した。その後、東京大学化学科を第１回生として卒業し、アメリカ留学を経て東大、京都帝大の教授を歴任している。

中垪和谷村（現在の美咲町）で生まれた岸田吟香（天保４（1833）年～明治 38（1905）年）は、坪井下村（現在の津山市坪井下）の安藤家で学僕として学んだのち、津山城下、さらに江戸へ遊学。横浜の医師ヘボンの編纂していた辞書『和英語林集成』を手伝い、のちヘボンから習い覚えた処方で、日本で最初の液体目薬「精錡水」を販売した。わが国最初の邦字新聞「海外新聞」の刊行など、多彩な活躍をしている。

## ■在村蘭学の担い手たち

村や町で活躍した医師（在村医）たちにも、宇田川家・箕作家の門人がいる。仁木永祐（文政 13（1830）年～明治 35（1902）年）は、下津川村（現在の津山市加茂町）の豊田家に生まれ、籾山村（同津山市籾保）の医家仁木家の養子となった。18 歳で江戸へ出て箕作阮甫や宇田川興斎に学び、帰郷後は医業のかたわら籾山黌を開いて近隣の子弟の教育に努め、明治期には自由民権運動でも活躍して「美作板垣（美作の板垣退助）」と呼ばれた。

同じく箕作阮甫の門人である石生村（現在の勝央町石生）の原村元貞（文政 11（1828）年～明治 40（1907）年）や、杉田玄白の門人で宇田川玄真と親交があった岡村（現在の勝央町岡）の医師小林令助（明和６（1769）年～嘉永４（1851）年）、シーボルトの開いた鳴滝塾に学んだ石坂桑亀（天明８（1788）年～嘉永４（1851）年、現在の美咲町境出身）や石井宗謙（寛政８（1796）年～文久元（1861）年、真庭市旦土）、長崎へ遊学した服部秀民（寛政 11（1799）年～天保８（1837）年、津山市上野田）や高山俊斎（天保３（1832）年～明治３（1870）年、津山市井口）、京都の医家究理堂門人の江見敬輔（文化 14（1817）年～明治 20（1887）年、美咲町吉ヶ原）や岩本徳太郎（文化 15?（1818?）年～嘉永７（1854）年、津山市里公文）、蘭漢折衷医である華岡青洲の医塾に学

んだ芳村杏斎（天保７（1836）年～明治 38（1905）年、真庭市蒜山上福田）や山田純造（天保７（1836）年～大正５（1916）年、美作市海田）など、有名蘭学塾に学び、地域で活躍した医師たちは枚挙にいとまが無い。こうした人々が、江戸時代後期から明治時代初期にかけて群をなして現れ、学術文化の発展に貢献した。これが「津山の洋学」といわれるゆえんである。

## 構成文化財

### 1 宇田川家墓所（津山市西寺町　泰安寺）

１－①　宇田川家墓所

１－②　泰安寺宇田川家墓所

宇田川家の墓所はもとは東京の浅草誓願寺の塔中長安院にあったが、関東大震災で火を受け、昭和４（1929）年に多磨霊園へ移された。平成元（1989）年、宇田川三代墓所移転実行委員会によって玄随・玄真・榕菴・榕菴と世與夫妻の墓所が津山市西寺町の泰安寺に移された。津山で没した興斎の妻お梶と四男轍四郎の墓も泰安寺にある。

### 2 宇田川興斎屋敷跡（津山市北町）

２－①　宇田川興斎屋敷跡

参勤交代の制度が緩和され、藩主の国元滞在が長くなった文久３（1863）年、宇田川興斎は藩命によって津山に居を移し、明治５（1872）年に前藩主慶倫夫人に従い東京へ移るまでの約 10 年を過ごしている。平成９（1997）年、屋敷跡の一角にあたる部分の土地が市へ寄贈され、津山市教育委員会によって解説板が建てられた。

### 3 楢原箕作家屋敷跡と墓所（美作市楢原）

３－①　楢原箕作家屋敷跡と墓所

箕作氏は近江源氏佐々木氏の支族で、箕作山（現在の滋賀県）の城主となったことから、箕作を称した。織田信長の上洛に抵抗し、敗れて各地を転々とし、大坂冬の陣で豊臣方について再起を図ったが敗れて小豆島に逃れた。その後、阮甫から４代前にあたる泰連・義林兄弟が親族を頼って楢原上大谷（現在の美作市楢原）に居を移し、弟義林はさらに津山へ出て、兄泰連が楢原に残った。その楢原箕作家の墓所である。

### 4 林田箕作家墓所（津山市林田）

４－①　林田箕作家墓所

津山へ出て森家に仕官した箕作義林から、その子で医業を始めた貞弁、貞隆、阮甫の父、貞固までの４代の墓所。平成 11（1999）年、阮甫の生誕 200 年に合わせて有志による整備事業が行われた。なお、阮甫以降の箕作家は、東京の多磨霊園と谷中霊園に墓所がある。

## 5 箕作阮甫旧宅（津山市西新町）

５－①　箕作阮甫旧宅

元禄 10（1697）年の「町方改帖」に「本道　西新町　箕作玄甫」とあり医業を開いた貞弁の代から西新町に居住していたことが分かる。阮甫もここで生まれ、14 歳までを過ごした。昭和 17（1942）年、「箕作屋敷」と伝えられていた旧宅を津山市が買い上げ、昭和 50（1975）年３月に国指定史跡となり、翌年から解体復元された。

## 6 砦部教諭所跡（真庭市砦部）

６－①　砦部教諭所跡

箕作秋坪の実父菊池士郎が学監を勤めた、庶民教化のための教諭所の跡。石垣は教諭所当時のものと伝えられる。教諭所は、幕府代官早川正紀が社会教化のために久世（現在の真庭市）に典学館をひらき、その都講として秋坪の曾祖父菊池正因（しょういん）を招いたことにはじまる。のちに久世が津山藩の預かり領となったことで、文政５（1822）年に砦部へ移され、名称も教諭所と改められた。秋坪の生誕地でもある。

## 7 津田真道生家跡（津山市上之町）

７－①　津田真道生家跡

津田真道が生まれ、18 歳までを過ごした生家は現存していないが、その跡地には、平成８（1996）年に津山市教育委員会が解説板を設置している。

## 8 仁木永祐顕彰碑（津山市籾保）

８－①　仁木永祐顕彰碑

仁木永祐没後 24 年を経た大正 15（1926）年に、門人と有志からの寄附金で建立された顕彰碑。永祐門人の中島大次郎が建設委員長、安東久次郎ら 10 名余りが委員を務めた。題字は西園寺公望、碑文は早稲田大学教授の西弐（はじめ）、書は清水文造による。

## 9 籾山黌跡（津山市籾保）

９－①　籾山黌跡

仁木永祐は江戸遊学を終えて帰郷したのち、23 歳で大坂へ出て後藤松陰から漢学を修得している。帰郷後私塾を開き、漢学や儒学、医学も教えた。万延元（1860）年には藩の許可を得て籾山黌を創設。当初は備中の林李渓を教授に招いたが、明治２（1869）年から永祐が教授となっている。

## 10 久原躬弦・茂良生誕地（津山市二階町）

10 －①　久原躬弦・茂良生誕地

久原躬弦と、躬弦の弟で医業を継いだ茂良は二階町で生まれた。現存する建物は、大正末期に茂良が神戸の洋館を参考にして建てたもの。平成18（2006）年に二階町の町内会によって碑が建てられている。

## 11 岸田吟香生誕地の碑（美咲町栃原）

11 －①　岸田吟香生誕地の碑

生家はすでに取り壊され、跡地は田畑になっている。現在、生誕地を示す石柱が建てられている。

## 12 岸田吟香記念碑（美咲町栃原）

12 －①　岸田吟香記念碑

旭川ダムの湖畔にある岸田吟香の記念碑。昭和26（1951）年に津山市に岸田吟香顕彰会が設立され、講演会、展覧会などの記念事業の一環として、吟香の出身地垪和村（現在の美咲町）の尽力で建てられたもの。碑銘は馬場恒吾、撰文は杉山栄による。

## 構成文化財（関係施設等）

### 1 箕作阮甫像（津山市大谷　津山駅前）

１－①　箕作阮甫像

平成 14（2002）年、津山市内の津山・津山鶴山・津山やよい・津山衆楽の５ライオンズクラブと津山ライオネスクラブが合同で建立した阮甫像。タイトルは「若き日の洋学者 箕作阮甫」。25 歳で洋書を手に江戸へ旅立つ、立志の姿である。田中彰氏制作。

### 2 岸田吟香記念館（美咲町西川）

２－①　岸田吟香記念館

吟香の出身地である美咲町の文化会館内に開設された資料館。吟香の書画や書籍、精錡水の引札や薬看板など多数の資料を収蔵し、吟香の業績を紹介している。

### 3 津山洋学資料館（津山市西新町）

３－①　津山洋学資料館

昭和 53（1978）年開館。美作地域ゆかりの洋学者の資料を収集・保存・展示公開する。平成 22（2010）年に国指定史跡箕作阮甫旧宅の東隣に移転した。前庭には宇田川玄随・玄真・榕菴、箕作阮甫・秋坪、津田真道の銅像がならぶ。

### 4 津山郷土博物館（津山市山下）

４－①　津山郷土博物館

昭和 26（1951）年に開館した津山郷土館を前身とし、旧市役所庁舎を改修して昭和 63（1988）年に開館した。津山藩の藩政資料（津山藩松平家文書、県指定重要文化財）を所蔵。

## 構成文化財（県外の関係史跡）

### 5 津山藩鍛冶橋門内屋敷（東京都千代田区丸の内）

津山藩は元禄 11（1698）年に江戸城鍛冶橋門内に居邸を拝領、その後規模を拡大しながら上屋敷として存続し、明治を迎えた。宇田川家・箕作家はおもにこの鍛冶橋の藩邸に居住した。

5－①　津山藩鍛冶橋門内屋敷

### 6 浜町屋敷（東京都中央区日本橋蛎殻町）

6－①　浜町屋敷

安政 3（1856）年拝領。明治元（1868）年、箕作秋坪がここに私塾「三叉学舎」を開いた。「三叉」の名称は、当時藩邸の前で隅田川が三つまたに分かれており、地名を三叉と呼んでいたことにちなむ。

### 7 蕃書調所跡（東京都千代田区九段下）

7－①　蕃書調所跡

幕末に幕府が設けた洋学の研究・教育機関。安政 2（1855）年に古賀謹一郎が頭取を命じられ、安政 4（1857）年に開所。開所にあたり、箕作阮甫が教授職に任じられた。

### 8 お玉ヶ池種痘所跡（東京都千代田区岩本町）

8－①　お玉ヶ池種痘所跡

安政 4（1857）年、箕作阮甫は伊東玄朴、戸塚静海ら同志とともに、天然痘予防のための種痘館の設立を発起し、幕府に請願書を提出した。翌年認可されて、お玉が池の川路聖謨の拝領地に種痘所が設けられた。このお玉ヶ池種痘所はのちに幕府の管轄（西洋医学所）となり、東京大学医学部の起源の一つとなっている。

## 日本の近代化を支えた津山の洋学

※番号は構成文化財の写真番号